

幸福の赤いサフランボ



3月27日朝、霜が降りた。サクランボ栽培で減収につながる1番目のリスクは、花芽の中のめしべが凍って枯れてしまう霜害だ。

前日の天気予報は最低気温を零下1度と伝えていた。いつものように午前4時半、外気温を確かめると零下2度。午前5時前から園地をひと回りした。木の枝先や下草、雨よけハウスのパイプの表面がうっすらと白くなっていた。

県村山総合支庁などの資料によると、サクランボの霜害発生の目安は、花芽の発芽後1週間までは零下5度、10日までは零下3度、

入念に霜対策花芽守れ

開花直前は零下1度。それぞれの後、花芽を点検してみると予想通り、被害は確認されなかった。霜害が発生するとしている。

今年の発芽時期は平年より4日くらい早い3月21〜22日ごろと見込んでいた。だから、27日の時点では、零下2度で霜は降りても、大きな被害につながることはないだろうと思っていた。その日の午



膨らんだ花芽を見つめる
筆者＝山辺町の多田農園

多田耕太郎 1954年山辺町生まれ。金山町のスリッパ工場長を経て、41歳で就農。2009年に法人化し、2・7畝のサクランボ園を経営する。

ひとまず胸をなでおろしながらも、一刻も早く防霜対策をしなければ、と焦る気持ちになった。対策としては、樹上から散水し、木の表面についた水が凍る時の凝固熱を利用して内部が零度より下がらないようにする「氷結法」や、灯油を燃やして熱の放射と空気の対流を利用する「燃焼法」、防霜用の温風ヒーターを利用する方法がある。私は園地の立地状況に応じて使い分けてきた。一番効果的でランニングコストが安いのは氷結法だが、十分な水源と、ポンプやマイクロスプリンクラーなどの設備が必要。水田用水の通水が始まる4月上旬にならないと水源不足になる場所もあり、それまではコストの割に効果が低い燃焼法に頼らざるを得ない。花芽がふくらみ、開花に向かう頃は霜害リスクが次第に高まる時期でもある。しばらくは夜、眠れない日々が続きそうだ。